

「菊花の約」古意

山 本 秀 樹

昨年一月に出た秋成研究会編「上田秋成研究事典」(笠間書院)が上田秋成研究の大きな節目になることはまちがいないだろう。

その中の「兩月物語」の「菊花の約」についての「研究史」(木越治氏担当執筆)の項に選ばれた九編の論文のうちには私の旧稿「菊花の約」と徂徠学派——「信」と「輕薄」——(「文学」隔月刊第10巻第1号、平成二十一年一月)もふくまれており、ここでは次のように言われており、私はさらなる展開をうながされている。

「輕薄」の語を、同時代の徂徠学派やその周辺の漢学系学者の著作の中から示しているのがなにより新鮮である。「菊花の約」への言及はあまり多くないが、今後、作品を読んでいくうえで新しい展開のヒントとなる、大切な指摘である。山本には、別に、木越論への反論を中心にした論もあるが、いささか聞き飽きた議論を繰り返すより、自身のこの重要な指摘をさらに作品論的に進化させる道を歩むべきであろう。

木越氏がついでに触れられた私の別論「兩月物語」「菊花の約」

解釈の諸問題——テキストの解釈行為分析・テキスト解釈生成学を指して——(「高知大國文」第43号、平成二十四年十二月)は全二十七ページといささか長いが、最後まで読みとばさず読んでいただければ、何も木越氏への反論を中心にしたわけではなく、すべての論を検討して、ほかの論文がすべて消えて、参考にすべき論文として、最後に木越氏の論説しか残らなかつたということが理解いただけるはずで、その意味、私自身の自覚するところでは、木越氏論文の本質的重要性を(逆説的にもせよ)明らかにしたものである。しかし、その最後部において「菊花の約」の末尾の教訓の解釈に関する木越氏の論法のうちにくまれる問題を指摘し、解釈の百八十度反転を行ったので、氏は私の別論を最後まで読まなかつたか、解釈の反転を無いことにされたものと思われる。

ともあれ、本稿は、木越氏のうながしに触発され、奮起して新たな展開を目指そうとしたものであるが、結果明らかになつたことは、私自身の論点は、やはり先の二論において出尽くしている

ということであり、本稿は先の二論で述べ足りなかつたところを補足的に述べるといった性格のものとなつた。

まず前置的に確認しておきたいことは、これまでの日本文学研究パラダイムでは常に忘れられないことであるかのように「新しい読み」「新しい読み」と、まるでそれ自身が目的化しているかのごとくに唱えられてきたが、しかし、それではなぜ「新しい読み」が必要なのか、その理由については不問にふされてきたということである。一度その前提を疑つてみれば、戦後、価値観が激変し、みな目の前でテクストの読みが更新されてきた驚きによる習性でそう思い込まれていただけにすぎないとも思われ、格別ことさらな「新たな読み」の必要性を唱えることは、研究者が自分自身のやつていることに価値を賦与するためにやっているエクスキューズにも見えてくる。

また、木越氏たち、全共闘世代を中心とする研究者たちが開いた、世間知らずの小児中坊的学者左門とする「解釈」、そのような彼に対する不満不信説が、本質的に何だつたかを、私の別論の検討をふまえて表現しなせば、それは決して「読み」でも何でもなかつたわけで、それは語り手が語り続けた主人公たちの行為・言明に対して、全共闘世代的には、われわれ現代人はそれを肯定するわけには行かない、われわれはそれに付いていけない、

という倫理「批評」——それは「批評」だつたと言わざるを得ない。

あたかもフェミニズム批評が、作品にふくまれる対女性意識の低さを批判するように、主人公たちの持つ倫理意識に関する不満不足点を批判しているのである。

しかし、最近、私が認識するところでは、真に必要なものは「テクスト理解の成熟」であつて、テクスト理解が成熟するとき、そこでは常に同時に「読み」は更新されているはずなのだ。

たとえば、(私の先の論もふくめて)これまでテクストの論理に即して解説されたことなど一度もなかつたと言える場面として、「菊花の約」一編のきも、義兄弟となつた村の儒学者左門と旅の武士赤穴宗右衛門の再会の日をさだめるシーンをあげることができ。角川ソフィア文庫で言うところ、「菊花の約」全15ページのうちの6ページめ——仮に分量だけを目安に前・中・後段に三分割しても全15ページの5ページ過ぎで中段に当たるが、なおかつ内容的にもちやうど主要登場人物が出会う状況設定が終わつて、ストーリーが動きを見せようとするところである。ここを取り上げるのは、決して登場人物に対して批判的ではない語り手が、ここをどのように理解しているのか説明することがきわめて困難な場面だからである。

左門・宗右衛門への不信を述べる口火を切つたうちの一人、松田修氏(「菊花の約」の論——雨月物語の再評価(2))、松田修

著作集」一八、右文書院、平成十五年）などは、この会話を解説して、二人の恋愛関係を読み取ってしまったという、別の立場からも鍵となる、きわめて重い意味をもつセリフのやりとりであるが、まず語り手は季節の変化について語って段落の節目を告げる。

昨日今日咲きぬると見し尾上の花も散りはてて、涼しき風による浪に、問はでもしるき夏の初めになりぬ。

とは、テキスト上は「菊花の約」の冒頭で、春の柳を家の庭に植えるな、と、季節を交えた教訓から始めたことを受けたものになっている。

と言うのは、冒頭の教訓のあと、本話を語り始めてこまで「菊花の約」は季節のことを言わないわけで、冒頭で、春の柳は秋の初風が吹けば葉の姿が消え失せてしまう、——それは心変わりのメタファー——なので、儒学者のみならず、倫理を心にいたす者は家の庭に植えるな、と言った冒頭の季節をひきついで、春が終わり、次に心変わりの起こる秋がひかえる夏が訪れたことを——むしろそのひかえている秋のほうを読者に意識させるための季節描写と思われる。

「菊花の約」では冒頭の教訓中の春の季節が季節の記述として併用されている。この辺りに「菊花の約」の語り手の存在の様相が特徴的に表れていると言つてよいと思われる。すなわち、「菊花の約」の場合、語り手は、のっけから教訓を発することによつてその存在をわれわれの前にあらわにし、みずからの存在を強調

してしまふわけだが、その教訓中の季節が本話中に連続していることによつて、教訓と本話の語り手が切れ目なくつながっていること、同一位相上の地続きであること、をわれわれは教えられる。

冒頭の教訓から一貫した視座にいて語るこの語り手は、講釈師として読者の目の前の高座で高らかに教訓を告げ、本話を語っている体のいわば近世的語り手なのだということを示していると思われる。本話は、意図を持つ語り手に統括されたお話しである。そのような語り手の性格が、この、本話の季節がそのまま冒頭の教訓の季節を受けていることに明瞭に表れていると思われる。

さて季節は夏となった。物語では、この夏の初めに、秋にまたふたたび訪れることを内容とする約束が結ばれる。軽薄の人ならば秋にふたたび訪れることはない、という含みを持つ季節である。

赤穴、母子にむかひて、吾が近江を逃れ来たりしも、雲州の動静を見んためなれば、一たび下向てやがて帰り来り、菰水の奴に御恩をかへしたてまつるべし。今のわかれを給へ、と言ふ。

「あるいは、これが二度と帰っては来ない軽薄の人なのではないか」と読者は思う。佐藤春夫に対して谷崎潤一郎が言った冒頭の教訓語による効果である（佐藤「あさましや漫筆」）。

左門の薬と看病で治してもらつた病が癒え、左門と義兄弟となつたあとの展開として、赤穴が帰りたいと言ひ出すのはきわめて自然な展開と思われる。彼は出雲国松江の人、同国富田城主によ

って番使として近江国の出雲守護職佐々木氏綱のもとに派遣された。だが、彼の近江滞在中に出雲富田城は尼子経久に乗っ取られ、彼は故郷の現状を知らない。しかし、彼は尼子の富田城の通りの報に接するや即座に富田城奪還を佐々木氏綱に進言し、佐々木の扶搖を確認するや即ち母国に向かった旅の途上、加古で不慮の病に伏したのであった。そんな彼にはとにかく帰って母国の情勢を知りたい気持ちがあった。のちに靈体となつての加古帰還の際、左門に述べたところによると、出雲の「国人大方」^{くにびと}尼子の「勢ひに服」して旧主の「恩を顧みる者なし」と言っているからおそらく彼には国の情勢次第では巻き返しをはからんとするつもりがあった（この辺り「菊花の約」では赤穴帰国の意図がまったく明かされないが、実力で城主領主となつた者に叛乱が許されるとすれば、それは江戸時代の秩序にまでおしよぶ理屈と言えるだろうから、書けなかつたのかも知れない）。そんなことで彼にはどうしても一度出雲に帰らねばならない理由があった。

ここで注目すべきは、命を救われた恩返しのために赤穴が加古に帰って来て左門母子に仕えると言っていることである。出雲が赤穴の母国で、彼は軍学者として旧城主に——また、のちに新城主と会見しても評価されている。彼が加古で無用の人としていたずらに骨を埋める意味は、左門に対する過剰な申し出、ということになる。

「旧城主の軍学の師」であつて家来ではなく、「使い」にすぎな

い、という彼の立場は周到に設定されたものと思われ、故郷の状況にかならずしも彼にとつて決定的に不利な要素はなく、彼は新城主にもすぐれた軍学の師として迎えられ得る立場として設定されている。実際、物語で赤穴は不本意ながらも従兄弟丹治のすめによつて新城主に会い、新城主の人柄を確認している。そして、その際、彼は新城主に引き留められている。すぐれた軍学者というのが作中の設定なのだから当然のことである。赤穴が新城主に召し抱えられるというのも、十分起こり得る事態のひとつであつた。

二君に仕えずというのは赤穴自身は堅持したがつた武士としてのひとつの倫理だったが、正確に言えば赤穴は家臣ではなく、また、現実的には、赤穴の気持ちを变えるだけの人格的徳が新城主に備わつていれば新城主にくどきおとされる、あるいは、ほだされてしまふ、といった事態は、物語の分岐選択肢としてはまだあぐまれていた。

ところが、ここで武士赤穴は、村の儒学者——以後これと呼ぶにふさわしいことばとして「村夫子」と呼ぶことにする——左門に命を救われた（村人が恐れた熱病を一人治してくれた）恩を返すために、——しかも武士である赤穴が何と左門母子に仕えるために——何とすぐさま加古駅に帰つて来ると言った。

赤穴は武士である。語り手が地の文で明らかにそう呼んでいるのだからまちがいはない。対して左門は氏も素姓もない（は言い

過ぎであるが）村夫子——つまりは庶民にすぎない。それが江戸時代の身分理解であるはずだ。実際には身分差があつて、対等のつきあいになるはずがないのに、たがいの人格識見を尊重し合うがためにふたりは対等の態度を選択し合つてゐる。

武士赤穴宗右衛門が「名誉も地位も問題にしない」人物設定なので、作中左門を対等の人物のごとくに遇してゐるのである。赤穴がこういう態度を取る人間でなければ左門の赤穴に対する態度が対等になるはずはなかつた。富田城主の軍学の師たる武士が、このように村夫子の人格識見を評価して対等の態度を選ぶところに、赤穴の人間設定が表現されてゐる。

出雲の武士が、命の恩人のために加古で学者親子に仕えて骨を埋めると言う。これがまず赤穴側が示したまことの情である。そこまではする必要のない申し出であり、武士赤穴宗右衛門の過分の温情とも言うべき行為である。それに対して左門が言った「さあらば兄長あにさまいつの時にか帰りが給ふべき」という問い。

——ここに語り手の感情説明は付随してゐない。「雨月物語」はひかえめとは言え、感情表現を補足すべきところには補足するテクエストである。「菊花の約」でもごくひかえめとは言え、感情説明は出て来、それは多く動詞を用いて表現されている。とすれば「菊花の約」で語り手の感情補足がない場合、おたがいが平靜に「ごく普通の態度でしゃべつてゐるから説明をする必要がないのだ」と考えるべきである。感情説明のない発言に関して、われわれは

話し手の感情の動きをことさらに想定する必要はない。「さあらば兄長あにさまいつの時にか帰りが給ふべき」という古文体がまた落ち着きはらつた感じを醸し出している。

とすれば、これは次の「秋はいつの日を定めて待つべきや。ねがふは約やくし給へ」と一連の質問と思われる。左門のつもりとしては最初から日を聞くつもりであつた。——なぜか。

「地位も名誉も問題にしない」この対等のつきあいが可能な、人格的にも立派な武士の帰還を礼をもつて遇するためだ、というのが、これに続く「兄長あにさま必ず此の日をあやまり給ふな。一枝の菊花うづきばなに薄酒を備へて待ちたてまつらん」との意図説明によつて明らかにされてゐるのである。

武士である赤穴が村夫子左門をあまりにも対等、あるいは、どうかすると彼に仕えると同様で言うほどに「地位も名誉も問題にしない」人間なので、われわれは二人の間にある身分差について忘れがちであるが、左門が、赤穴が武士であることを忘れてははずはない。武士の来光を出迎えるのに、気持ちを表すための形としての儀礼が、もてなしが、ないはずがない。それが江戸時代村の儀礼の当然であるはずである。

みずからの気持ちの形としてあらわし、礼を尽くすためには日にちを聞いておかねばならない。だから左門は日の指定を求めたわけである。彼にできることは心ばかりのほんのわずかなことにすぎないのだが。

最初に赤穴が日の指定にまで及ばなかったの——それはそれで自然な反応だと思われるが——左門が丁重に「秋はいつの日を定めて待つべきや。ねがふは約し給へ」と重ねて問うたわけである。

この何れの問いに対しても、赤穴は平静に、あるいは、躊躇なくそれに応じた。

「月日は逝きやすし。おそくとも此の秋は過ぎじ。」

「重陽の佳節をもて帰り来る日とすべし。」

夏の初めの四月に中国山地を越えた向こう側の出雲に行き、引き返して帰って来るのに、遅くとも九月は過ぎないだろうと言う先に「やがて帰り来たり」と言ったにもかかわらず六ヶ月もの期間が取られている。赤穴にはすぐには帰って来られない心づもりがあった。先に述べた情勢次第の城の奪還である。そのために必要な期間としてともかく六ヶ月を確保したわけである。加古・富田間の移動が十日で可能であることは、このあと物語内で、赤穴自刃の霊体となつての加古駅掃蕩への恩返しとして左門が富田に到達するまでに要する日数として明らかである。

この半年という長さは、赤穴の意図の読めない読者には不思議の感を与えるものであるかも知れない。何をするとて半年もの日数を要するか、と。赤穴の意図をテキストが明かさないうことと言ひ、テキストは赤穴に不審の眼を向けさせようとしているかも知れない。

いずれにせよ、ここで赤穴は、何のかの言いつくろつて、再会の日を一日にさだめないことも可能であった。しかし、赤穴はそうせずに、躊躇なく再会の日を一日にさだめた。

「互に情をつくして」とテキストが言うゆえんは、いざ説明しようとする、正直きわめて説明のむずかしい一節だと以前の私には思われたし、また、ここに関して納得の行く説明を聞いた覚えもないが、先程来述べ来たつたように、赤穴は（何と）加古に帰って来ると言い、左門はそれを気持ちの限り可能な礼を尽くして迎えると言う。そのため問いに、つねに赤穴はまっすぐに向き合つて応じる。——このような寸分ゆるみのない応答の行為が、ここでの「たがい」の気持ちの尽くし方に当たる。「尽くし」たというのは、たがいに、もうこれ以上の応え方はないのだ、という意味である。

いつという日の指定を求めるのは、こうして見ると、少しも彼の小児的自己の価値観への執着などというものではなく、あるいは、二人が恋仲などという執着連綿である必要もなく、作中の身分差設定を前提とした江戸時代的リアリズムから来るものであり、必然の問いなのであった。

ついでながら別案に関してもことわっておくと、鷲山樹心氏は、左門・赤穴男色説を唱えた松田修氏への反論として、世は戦国であり、明日のことも知れないから帰る日の指定を求める——とのような案を示された（『「菊花の約」——衆道論存疑』同氏「上田秋

成の文芸的境界」和泉書院、昭和五十八年)。これまで述べてきた私の理解にこれをあてはめると、城攻めにより赤穴の身がどうなるかわからないから、待つ期限として帰る日の指定を求める——とようになろう。しかし、この場合、左門もまた「ようすを見ん」だけでは赤穴の意図に気付いてはいないのだと思われる。それはのちに赤穴に自分の死を打ち明けられたときの左門の驚きの反応からそのように思われる。左門は赤穴の死の可能性を考えてはいなかった。

あら玉の月日はやく経ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊艶ひやかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも蚤く起出でて、草の屋の席をはらひ、黄菊しら菊二枝三枝小瓶に挿し、囊をかたぶけて酒飯の設をす。

先に述べたように人格識見ともに尊重すべき武士の帰還をもてなすための、静かな、心ばかりの儀礼的準備である。

午時もややかたぶきぬれど、待ちつる人は来らず。西に沈む日に、宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて心酔へるが如し。

先にも述べたが、十日で移動できる出雲から、半年も経ったこの日に帰って来ないということは、宗右衛門が口先だけの軽薄の士であったことを意味する。帰ってきて恩返しするということはリップサービスにすぎなかった、ということである。左門に批判的な論者は、「心酔へるがごとし」をこれまた小児的な反応だ

とか、恋愛感情だとか言うが、あれほどまでに頼もしいことは吐き、信義の士だとひとまずは信じもした人間が実は軽薄の人であったという現実を突きつけられるかもしれぬ、養兄弟にまでなったのに——信頼が深ければ深いほどに動揺は深い。——当然と言えば、当然ではないのか。

しかし、ここで赤穴が帰ってこない可能性が十分あることは、左門もわかっているものと思われる。というのは、赤穴が武士である以上、いつでも左門との約束を反故にしようと思えば反故にすることができると身分的・上位に立っているからで、赤穴が約束を反故にしたところで、村夫子左門には文句のひとつも言える筋合いの話ではない。上位者である武士は、下位者である庶民に対して必ずしも約束を守るとは限らないだろう。それが江戸時代的理(現実的警戒心)というものにちがいない。

そういう心変わりの可能性が十分にあり得るからこそ、冒頭のいましめはストーリー展開とわざわざからめられているわけである。赤穴宗右衛門はひとたび去ってふたたび帰ってこないかもしれない、と。

赤穴はいつでも軽薄の人に墮することができる。そして、彼が武士である以上、その違約を責めることは、左門には身分上許されない。

このストーリーは、言うまでもなく赤穴が、帰ってこない、口だけの軽薄の士である可能性を考えて組み立てられている。そし

て、それはおそらく、ここまで来ても、義兄弟になったとしても、二人の間柄を読者はまだ信じ切るわけにはいかぬ、生活も習慣もことなる、身分差を設定されていることによってリアリティを与えられているのである。

また、左門の反応ということの関係でさらに言うならば、左門は、霊体となった赤穴に自己の死を告げられ、赤穴の死を信じてからは泣きに泣く。出雲に向かうとなったその最中には、夢にまで見て泣いている。

これについて、左門・赤穴を恋愛関係と見るにせよ、左門を小児的と見るにせよ、大の男のふるまいではあるまい、との見方が大勢を占めている。しかし、私はかならずしもそのように思わない。

ひとり学問をこころざし、村ではずっと孤独であったとされる男が、心にひとつとしてたがうところのない男と出会った。物語はもはやその時点でリアリズムの設定から離れたと言えるわけで、わたくしにはこのような関係における人間が、充分な交わりをも持たぬまえに、交わりはこれからの楽しみとしていた矢先に、自分との約束のせいでその相手を失うという体験が、どれほどの悲しみをもたらすものなのか、それを想像することさえできない。

この二人は魂の双生児とも言うべき二人で、ふつうの二人ではないわけだから、失われたかけがえのないものために泣きに泣いて何がわるい、という気がする。——と言うよりもこのふたり

に関して、われわれふつうの人間には、理解は及ばないはずなのである。われわれふつうの人間の規矩で二人の関係をはかるわけにいかない設定がなされているのである。おそらくはそう考えるのが、自然な理解なのであって、そのために、作者によってことさらな、「心にひとつとしてたがうところのない」間柄の設定がなされたものと思われる。

二

さて——「菊花の約」の場合、実現が腐心される徳目は、「まこと」にしばられている。

約束がまもられることによって、言葉は実質化され、言葉が実現されることによって「まこと」の徳が実現されたことになる。そのような、端的に達成表現が可能な徳として「まこと」が選ばれている（あるいは、原作中国白話小説との関係を視野に入れるならば、「菊花の約」の作者によって「原作小説の設定が承認され、採用された」と見える。

現代の論者たちは、主人公たちの「信義」のわざとらしさを嫌い、彼らの「信義」に疑いをさしはさむが、そうではない。

すでに道徳が衰退した時代において、道徳は意図的になることでしか実現されない。「菊花の約」が主人公たちの言動を通して表示しようとしているのは、そのような思想である。

「菊花の約」の儒学者左門は儒学者なのだから、徳目の実現に

すべてをかける。それは当たり前のように、当時は当たり前ではなくなっていた。すでに「文学」論文で述べたように、徂徠学がそのような儒学者の道德の衰退現象をひきおこしていたからである。

しかし、木越氏論的に言えば、「菊花の約」でその徳目がストリー的に実現されたからと言って、最後に「軽薄の人と交りは結ぶべからずとなん」と、冒頭の教訓がくりかえされたとき読者は、自分たちが驚異的な道德実現力を發揮した主人公たちの側ではなく、軽薄の人側にしかないことを自覚するしかない、というのだが、これもそうとばかりは言えないことに、また最近気が付いた。

結局冒頭に与えられた「交わりは軽薄の人と結ぶことなかれ」の教訓は、最後にも「交わりは信義の人と結ぶべしとなん」と、表現的に反転されるまでのことではない。それはどういうことかと言えば、読者はまだ、交わりを軽薄の人と結ばないことを実現することができると、ということの意味しているのである。読者は何も、作中のごとき信義の人になれと言われているのではない。また、人は何も作中のことを実現できるかどうかレベルでのみ物語を受け取るわけではない。スーパーマンになれるかどうかを真剣に検討する人などいない。しかし、その行動に人は感化され、また昂揚を感じ、カタルシスを得るのだ（ここでもまた、「菊花の約」の本質が、リアリズム小説的ではないことが確認される）。

最後に行われる、新城主尼子経久の命^{くわ}によつて宗右衛門を幽閉した赤穴丹治を学者文部左門が殺すこと、は、現代人からはもつとも非難されるべき筋合いのことだが、これはわれわれ読者にはどうしようもないことで、語り手はどう見てもそれを承認するよう語っている（その態度は結びのことでは確認できる）。

現代人がそれを承伏できないと言ったところで、江戸時代に生まれたこの作品にはそれは知ったことではない。

左門は武士ではないから、江戸時代には必須であつた仇討ちをはずすべき義務は公的にはない。しかし、彼は武士の義弟となつた。そうであるからには、仇討ちは果たされなければならないとも言える。しかし、それについては、義弟であるからには義によつて行うべきだとも言えるし、本当の兄弟ではないのだからそれを行うまでの筋合いはないとも言える。このどちらを選択してもよい関係にしてあるのも作品設定の妙と言えて、どちらを選択してもよいのに、左門は、あえて、儒学者であるにもかかわらず、単身仇討ちのことを心に秘めて出雲に向かうのである。ここでも「義兄弟」という約束のことばに実質の誠を与えようとする判断がなされているわけである。

これまでの左門不信説では、仇討ちの相手が城主の命^{くわ}を守つて宗右衛門を幽閉したにすぎない従兄弟の赤穴丹治であつたことの意味が不審視されているといつてよい状況にあるが、江戸時代的感覚で言えば（この感覚については高田衛氏が「上田秋成研究序

「説」で早くに述べられているが、城主（＝領主・藩主）が仇討ちの対象になるわけがない。この場合、城主（＝領主・藩主）は身分差によって免責されているであろう。城主の命は、民主主義日本の価値観と異なっており、たかだか軍学師にすぎない赤穴宗右衛門の失われた一個の命と、その価値は同等ではない。領地を治める命、藩域を治める命と、たかが軍学師の命では、身分的に不均衡なのだ。

だから、奪われて釣り合いの取れる命は、命を受け宗右衛門を幽閉した従兄弟丹治の命にならざるを得ない。

左門は出雲で宗右衛門を幽閉した赤穴丹治を難詰し、その詰問に丹治が服したと見るや一刀両断に彼を討ち果たすが、その左門の難詰の理屈は、出典「史記」の前後の文脈から切り離されて、出典のもととのつながりから遊離して、現実性がないと、木越氏に批判されている。しかし、「断章取義」とはそういうものなのである。それが学問を主体的に現実に関わらせる方法であり、しかも、丹治は語り手が言うところによれば、明らかにそれに服した。

現代人は、それは余りにも個別的な判断だと——みながみな認める正しい、公的な判断と言えるかどうかと疑問を呈するであろう。しかし、儒学的解釈をここにほどこすとすれば、良知というものがおのれにそなわり、それが知と行為とを直結させ、知と行の合一がなされた。そして、良知がおのれにそなわるとする限り、

その行動に結び付いた判断は肯定されることになる。

中国由来の儒学の中でも陽明学は知行合一をキーワードとして言われる学派だが、この頃の反徂徠学の動きの中、陽明学の中でも極端に行動に結びつく陽明学左派の受容までもが生じていたことを指摘した中野三敏氏は、極端に行動に結びつく陽明学左派の受容と、反徂徠学の動きがどう関係するのか、について考察して、それが実践道徳を回復させるための動きであったと解釈できる趣旨の指摘をされている（『寓言論の展開』同氏「戯作研究」中央公論社、昭和五十六年）。

「菊花の約」で寓話的に描かれているのは、そういう道徳の主体性回復の動きなのである。

そう。この昔話のごとき、ほとんど語り手の説明と会話と簡潔な行為説明とで占められ、ほとんど動詞による簡潔な感情表現しか無く、（先程来確認しているごとくに）リアリズムの設定から離れた、この物語は、まさしく寓話的なのである。

そうして、「菊花の約」の最後の語りで、城主（＝藩主）はその道徳の完遂の行いを認めたことが語られる。「尼子経久、このよしを伝へ聞きて、兄弟信義の篤きをあはれみ、左門が跡をも強ひて逐はせざるとなり。吝薄の人と交はり結ぶべからずとらん。」

すでに別論で述べたが、霊体となって加古に帰還した赤穴の報告で、人を信頼しない資質とされる経久がここで兄弟の信義を評

価するのは、まことに意外な結果なのであって、だから、語り手は「咨」そんなことがあるのだ、と感嘆するのである。この感嘆符「咨」の意味合いについても従来あまりにも説明がなすぎた。

そして、同じく別論において私は、「軽薄の人と交わりは結ぶべからずとなん」の「となんむ」の後に省略されたことばについて問題とし、これが「はべる」等の通常の慣用形の省略ではあり得ないこと、この場合は、冒頭で語り手みずから言ったことをくりかえしているので、省略されたのは「私は言っておいただろう」ということばだ、という解釈を提示したが、それだけでもない、という教示を濱田啓介先生からのお葉書で得た。

つまりこの「軽薄の人と交わりは結ぶべからずとなん」は、世界みなひとの賛嘆であると。すなわち、濱田先生の解ではこの語り手は感嘆し「となん」以下を絶句。その言葉は同時に、そのままたこの作品を読むすべての読者によつて共有され、世界みなひとの感嘆、賛嘆となる——ということであろう。それを強いて明示化すれば「軽薄の人と交わりは結ぶべからずという、このことははみなひとに分け持たれる」ということで、それは教えとして分け持たれるということでもあろう。

三

全共闘世代を中心とする人々が開発した左門不信説は、それが特定の「菊花の約」と結び付けられること自体は「新しい読み」

であったかもしれないが、結び付けられた、書物かぶれの優等生の小僧っ子の理想をふりまわしての暴挙、といった把握内容自体は、前世代について語られることについて知っているわれわれ後続の世代にとつて少しも耳新しいことではなく、すでに別に聞いたことのあるスキーマのテクストへの当て嵌めにすぎなかった（別論）。今思えば、そんなことを「菊花の約」からも聞かないといけないのか、との思いなきにしもあらずの意見である。

しかし、こういったことは、今日何も「菊花の約」研究や「雨月物語」研究など、個別作品解釈特有の事情などではまったくなく、たとえば西田谷洋「学びのエクササイズ 文学理論」(ひつじ書房、平成二十六年)の、その序章にあたる「文学理論への招待」の3節「作家論と作品論」、4節「理論への招待」を読めば、本質的に文学研究領域で行われる「解釈」という作業が、そのような、物語テクストを他のものに言いかえることにすぎないことであることはすでに気付かれはじめている。

だからこそ、テクストを何に置きかえるのか、と言えば、江戸のものは江戸で説明しよう、というのが、中野三敏氏主唱の「後ろ」に「向」くこと(「戯作研究」あとがき)だと思われるし、それこそが、われわれ現代人にとつての真の他者、真の異物、真に「新しい」ものであるはずだ。

私に言わせれば真に「新しい読み」とは、私たちにとつて他者、異物、異文化の産物であるような読みであるはずなのであって、

私が目指す読みは、真に「古い読み」であり、「復古」である。

もちろん、これはきわめて知的な操作によってしか実現されないことは明白で、しかも、われわれが現代人である以上、われわれはその作業に成功したか失敗したかの判断も容易には付かないはずの至難の業なのだ、不断に、われわれの近現代主義が解釈に結びつくことを警戒しなければならぬということなのである。

もっとも、私が「菊花の約」を解説してみたいとした道德主体性の回復など、少しも新しくないという不満も出るかもしれない。しかし、江戸にもそんな思想的小説があり得たということ自体は新しいことであろうし、今日今現在もそういう課題を現社会はいだいているとしか言いようがない時点にわれわれはいま際会している。

しかし、そんなことよりも、木越氏が「性格の悲劇」ということばを用いたことによつて暗示的に見いだされたとも言える「菊花の約」と太宰治の潜在的つながり、よりももっと明確に、ストリー構造的に「菊花の約」と「走れメロス」との間に見いだされるインターテクスチュアリティのほうが、文学史的には興味深いことであるような気がするし、武士と庶民学者との間に結ばれる身分差を超えた連帯がもたらされる要因が学問、というモチーフのほうが、ある意味、江戸のパディイもの形態として江戸時代らしい要素であると思われる。学問こそが人の格差を乗り越えてゆく要因たりえるというモチーフである（それは、実際に武

士の先生を持った町人学者秋成の実人生とも二重映しになる）。

それにしても、本稿にふくまれる読みの部分のほとんどは、本稿執筆の最中に見出され整えられた。さまざまに論が試みられてみれば思いのほか解釈が定まらないことがあきらかになり、しかし、問題が自覚されさまざまに考えが練られてみれば、また、驚くほど、よりよい説明をテクストが生み出してくれる。このように、テクストにたたえられている周到な意味——それは作者の意図なのか、本能的直感的選択判断の結果なのかわからないが、何十年もの長期にわたる研究者の様々なアイデアによる検討へのこのテクストの応えぶりというものは、おそらく「名作」の資格として数え得るものであると私には思われる。

〔付記〕 本稿は、平成二十八年七月三十一日（日）、平成二十八年度
岡山大学言語国語国文学会（於岡山大学文学部会議室）において
「三つと説く菊花の約」と題して行った口頭発表用の原稿を文書体
に書き換えたものである。その際、字句表現に若干の添削を加えた。

（やまもと ひでき 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）